



十三行博物館

台湾北部の先史時代と鉄器文化を体験しながら学べる博物館

17世紀から語られることの多い台湾の歴史ですが、実は各地に先史時代の遺跡が点在しており、北部での代表格ともいえるのが港町淡水の対岸八里にある「十三行遺跡」です。台湾の鉄器文化を伝える遺跡からは、陶器、鉄器、墓など、様々な文物が出土しており、約1800年前から500年ほど前まで、ここに製鉄技術を持つ人々が住んでいたことがわかっています。1990年の初頭に、遺跡がある場所に污水处理場が建設されることになったことから、遺跡の保存運動が起こり、更に遺跡の発掘作業がすすめられ、焼き物のかげらや金属器、石器などが発見されました。保存を求める多くの声に応え、十三行遺跡は国定遺跡に指定され、遺跡の9分の1が保存されることになりました。出土品の陳列館として2003年に「十三行博物館」が正式に開館しました。十三行遺跡地層、考古学試掘坑現場模型、遺跡発掘ビデオ、バーチャル体験コーナーなど、考古学についての知識が学べる体験型の博物館です。



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/614/



エリア

新北市

テーマ

歴史

民族

自然

芸術・文学

学びのポイント

1.

**十三行遺跡は
いつ誰が見つけたのでしょうか？**

1955年、空軍のパイロットが近くの観音山上空を飛行したときに、羅針盤の磁力の異常な反応に気づきました。調査の結果、台湾の先史時代の人びとが残した「鉄」によって引き起こされた反応であることがわかり、先史時代の遺跡と断定されました。考古学では、遺跡の発見場所の地名を命名することが通例であることから、「十三行庄」という地名にちなんで「十三行遺跡」と名付けられました。

2.

**「十三行」という名前の由来は
何でしょうか？**

由来には諸説あります。清朝の時代、ここは重要な港で、13の貿易商があったことから「十三行」（「行」は「銀行」にも使われているように商店を意味する）と呼ばれたという説。あるいは、中国大陸から海を渡って来た男たち13人がここで開墾を行ったことにちなむとする説。また、先住民族が呼んでいた地名を音訳したものだとする学者もいます。

3.

**「十三行遺跡」に暮らした人々は
どのような生活をしていました
のでしょうか？**

遺跡がある八里という場所は、海と川が合流する淡水河の河口に位置するため水産資源が豊富です。このため、遺跡からは漁や貝を砕くために使われた網のおもり石や凹石などの石器、また、魚の骨や貝殻も多く発見されています。